

試験場の付近

渡辺啓吾

ご来場の方は当場の裏に二次林の山なみがあるのをご存知でしょうが、珍らしくチェーンソーの音がするので、行ってみたら、おとなりの専修大学農工短大の山林が、草地実習地にするため1haほど皆伐されていた。

この林地から次のことがわかった。モヨギ原があって、これは住居あとらしく、近くにスモモやウメらしいものが数本立っている。

カラマツが造林されていて、樹令が20～40年ほどにわたっていて、その中にニセアカシアが侵入している。沢沿いに広葉樹が伐られていて、ミズナラ、シナノキ、エゾイタヤ、ベニイタヤ、ホオノキ、ハリギリ、キハダ、ニガキ、ウダイカンバ、シラカンバ、ケヤマハンノキ、エゾノウワミズザクラなどあって、年令は40～50年で、太いものの胸高直径と樹高は次のとおりである。

	胸直径	樹高		胸直径	樹高
ミズナラ	34	18	ウダイカンバ	30	17
ベニイタヤ	30	16	シラカンバ	35	22
ハリギリ	37	26	エゾノウワミズザクラ	32	18

このあたりは大正2年に三笠方面からの山火で焼けたものという。三笠方面に向って南西に傾斜している当場の82haの裏山実験林はトドマツ林であったというから、さぞ火が走ったことであろう。この火が山を越えて当场の方へ進んできたのだろうが、このあたりは石まじりの土地の針広混交林で、通直でマキにするのに割れやすい立派なミズナラがあったという。下の粘土地になると割れにくいナラになって、さらに下方の泥炭地はヤチダモが多かったという。上美唄には埋木が土工のさまたげになっているところがあって、1mの上から見る土中のヤチダモは樹幹の丸味がわからぬほど太いものだという。

これは想像だが、この山火後に、山すそに農家が移住してきて、やがて泥炭地の客土事業が進むにつれ、あと地にカラマツを植えては、下に移住していったものかと思う。このカラマツも結構な生長であるけれども、山火あとの自生の広葉樹の生長も前記のように立派なもので、下手な造林など、とてもかなわない。民有林に多い広葉樹二次林の施業は非常に貴重で興味のある仕事である。

もう一つの話に、場内を流れる小川があって、古い場員は初代場長横山八郎氏に因んで八郎沢という。たびたび氾らんしたので、沿山ダムが3本入っている。これをさかのぼると土えんていがあり、その上に静かな美しい溜池があらわれる。これをかこむ円やかな地形に立つ、広葉樹林がとてもうつくしい。

水を溜めてからであろう。上の水位があがって沢の木が枯れてきて、これにコゲラやコムクドリが巢を争いながら住みついている。この水辺の森には、ある夜明けには25種の野鳥のさえずりがきかれる。近くの国道12号線は真夜中も車のうなりが絶えない、大事故の多い恐ろしいところだが、そこから1km山へ向えば、こんなすばらしい自然がある。札幌のお客さんをご案内したら、ずいぶんと感心していた。心配なのは民有林なので、いつ伐採されるかしのこである。
(研究第一部長)